第13回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

読解力、表現力 育む

第13回みんゆう新聞感想文コンクールは、小学3年生から高校生まで県内92校から1520点の作品が寄せられ、審査の結果、小学3・4年生の部、5・6年生の部、中学生の部、高校生の部の各部門で最優秀賞、優秀賞、入選及び学校賞が決まった。このうち、最優秀賞、優秀賞に輝いた作品16作品を紹介する。【敬称略・原文のまま】

コンクールは新聞を活用した教育事業・NIEの一環として、読解力や表現力を育て、広い視野と豊かな心を養ってもらうことを目的に行われた。県内各地の青少年から新聞記事を読んだ感想や意見、提案など幅広い作品が寄せられ、県中学校教育研究会国語専門部長の千葉英一福島市立北信中学校校長を審査長に審査を行った。審査員は次の通り。

審査長＝千葉英一（北信中校長）▽副審査長＝花輪忠康（余目小校長）▽審査員＝渡谷朋子（蓬莱東小教諭）佐藤政俊（国見小校長）金沢理洋（小浜小教諭）佐藤尚美（北信中教諭）野口有美（平野中教諭）大波陽子（桃陵中教諭）佐々木茉耶（県北中教諭）渡部美穂（本宮二中教諭）佐藤寿雅子（白沢中教諭）高橋敏哉（県教育庁高校教育課指導主事）小野広司（福島民友新聞社取締役編集局長）

各部門の入賞者

◇小学３・４年生の部◇
◆最優秀賞
斎藤柚羽（杉妻小３年）
◆優秀賞
大井陽真（杉妻小３年）
平出蜜祐子（城西小４年）
桜井那菜（大島小４年）
◆入選
深田斎介（福大付属小３年）
押山桃真（玉井小４年）
佐藤瑛真（日新小４年）
八取孝太（関辺小４年）
渡辺結菜（城北小４年）

◇小学５・６年生の部◇
◆最優秀賞
平塚美琴（小金井小６年）
◆優秀賞
後藤優実（本宮まゆみ小５年）
柏原希音（大島小５年）
長谷川慶佑（福大付属小６年）
◆入選
佐藤奏向（福大付属小５年）
小針莉子（三河台小５年）
佐藤恵仁（醸芳小５年）
栗城侑空（柏城小６年）
佐々木奏輔（大山小６年）

◇中学生の部◇
◆最優秀賞
近野七彩（郡山五中１年）
◆優秀賞
小松和輝（湯本一中１年）
梅宮武琉（須賀川三中１年）
菅野笑瑚（醸芳中３年）
◆入選
坂本乙華（中央台南中１年）
渡部夕里（醸芳中２年）
飯塚悠文（明健中２年）
根本結衣（二本松三中２年）
菅野巴麒（醸芳中３年）

◇高校生の部◇
◆最優秀賞
荒木田麗未（相馬総合高２年）
◆優秀賞
安達一葉（福島商高２年）
鈴木こころ（学法石川高３年）
佐藤響（会津高３年）
◆入選
菊地南（福島商高１年）
遠藤里穂（福島商高１年）
但野愛莉（小高産業技術高２年）
佐藤萌夏（福島西高３年）
歌川萌子（福島西高３年）

◇学校賞◇
大島小、湯本一中、福島西高

審査長講評

本コンクールは、新聞記事の感想文を書くことで広い視野と豊かな心を養う目的で開催されています。本年度は、小、中学、高校合わせて92校、1520点の作品が寄せられました。昨年度よりも8校、94点も多くなりました。全体的には、新聞記事を読み、自分で調べたり家族と対話したりしながら自分の思考を広げ深めた作品が多くみられました。

小学3・4年生の部では、関心を持った記事内容と自分の生活とを比較しながら考えを深めている作品が多くみられました。ごみ問題、甲子園の話題、こども食堂、学校の統廃合、福島県の歴史など、様々な分野の記事をよく読んでいます。その中でも、地球環境と持続可能な開発目標（SDGs）について、家族との対話で考えを深めていった作品が多かったことは素晴らしいと思います。

県中学校教育研究会国語専門部長
千葉　英一さん
（福島市立北信中学校長）

自分の考え 社会に発信

小学5・6年生の部では地球環境の内容に加えて、福島県の良さを伝えた記事を読んで考えをまとめた作品も多くみられました。自分の住む地域に誇りを持ち、その取り組みを発信していこうとする意欲にあふれた作品もありました。いずれの作品も自分の生活と比較し、自分で調べたことを根拠として考えを深めていました。

中学生の部では、記事内容の感想にとどまらず、調べたことを根拠として自分の考えを堂々と述べる、小論文に近い作品もみられました。生命の大切さや日本という国の在り方、震災以降の社会の在り方についての中学生らしくすがすがしい意見が多くみられました。

高校生の部では、コロナ禍の時代だからこそ人々の絆の大切さを訴えたり、自分がなせることを模索したりと、記事をよく読み込んで、自分の考えとして発展させている作品が多くみられました。

インターネットを自在に活用する、Z世代と呼ばれる若い世代の皆さんが、新聞記事に触発されて視野を広げ、自分だけでなく社会全体がより良い方向に進むための方策を考えたり、家族や地域の人たちとの結び付きを再発見して豊かな生き方について考えたりすることはたいへん有意義なことと思います。日々刻々と更新される情報を自他の生活の向上に役立てるとともに、自分の考えを社会に正確に発信していこうとする姿勢を、これからも大切にしてほしいと思っています。

小学３・４年生の部

しらなかったゴミのこと

杉妻小3年　斎藤（さいとう）柚羽（ゆずは）

「夏休みは、一日一回新聞を開こうね。」

夏休みが始まる少し前、お父さんにこう言われました。はじめて新聞を開いて見出しを見てみると、いろいろな記事がのっていました。その中で毎日のようにかんきょう問題の記事がのっている事がとても気になりました。

わたしがすんでいる福島県は、一日一人あたりがだすゴミの量が全国でワースト2位です。わたしは、とてもざんねんな気持ちになりました。今までは自分が出すゴミの量なんて考えたこともありませんでした。どうしたらゴミの量はへらせるのでしょうか。そんな時、目についたのがリサイクルの記事です。

リサイクルされるものについてお母さんに聞いてみると、プラスチック、紙、カン、ペットボトルがあるそうです。リサイクルの記事の中では、日本のカフェで出された使いすてプラカップのおもさは、十年間で自動車二千台分です。かるい使いすてプラカップがそんな量になるなんてびっくりしました。お父さんもよくカフェに行くのでわたしもついて行く時がありますが、その時にグラスやマイカップを使えばゴミの量は半分にへると書いてありました。

ゴミはどうしても出てしまう物です。少しでもへらすためには、みんながもっと真けんに考えないといけないと思います。わたしの家では、お母さんはプラゴミを細かく切って捨てています。お父さんは、コーヒーの出がらしをかんそうさせて、しょうしゅうざいのかわりに使っています。新聞は、ゴミの問題やリサイクルのことをくわしく知ることができ、とても便利だと思いました。これからもわたしのすむ町がきれいであるように新聞からアイデイアをもらってごみをへらすど力をしたいと思います。

ワースト二位からナンバーワンへ

小金井小6年　平塚（ひらつか）美琴（みこと）

私が住んでいる福島県は、美味しい桃やきゅうりの収穫量など、都道府県別で上位に入る特産品が数多くあり、そんな福島県が私は大好きだ。だからこそ、この記事を読んだ時にはとてもショックだった。それは、県民一人当たりのごみの排出量が、二年連続全国ワースト二位になってしまったことだ。

このランキングは、県民一人が一日当たりに排出したごみの量を比較したものだが、福島県では特に食品廃棄物が全国平均よりも高い。人口五十万人以上の自治体で最も排出量が少ない京都市でさえ、四人家族の場合、一年間で六万円近い食べ物を無駄にしているということは、福島県ではもっと多くの食品を無駄にしていることになる。世界ではお腹が空いても十分な食事ができない地域や、戦争で食べ物を手に入れることすらできない人々が多くいる中で、日本ではごみとして捨てられているという事実が私はとても悲しく、同時に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

京都市民は「京都議定書」が採択されて以降、環境意識が高まり、地道にごみ削減に取り組んだことで、排出量を減らすことに成功した。それはつまり、一人一人がごみ削減についてきちんと意識することができれば、ごみは減るということを証明しているのだ。

今、私たち福島県民にできることはなんだろうかと考えた。例えば、袋詰めされていない野菜を購入したり、買いだめをせずに、必要な分だけを購入するなど、選択する時に意識する。また、牛乳パックやプラスチック容器はリサイクルするなど、使った後に工夫する。やり方を少し変えるだけで、ごみを減らすことができるのだ。それを一人一人が常に意識し実行することで、福島県がワースト二位からナンバーワンになれると私は思う。

中学生の部

私の驚き、日本人の油断

郡山五中1年　近野（こんの）七彩（ななせ）

現代の日本でこんなことが起こるなんて！七月八日、安倍晋三元首相が凶弾に倒れた。日本は安全な国だとずっと思っていた。だから、銃が町中で発砲されるはずがないと思い込んでいたのだ。新聞記事が、誤報ではないかと穴が開くほど見入った。信じられないけれど、とても衝撃的で悲しい現実なのだ。

日本では、銃を持つことは基本的には禁止されているから、一般の人は銃を持っているはずもない。なのに、なぜ犯人は銃を持っていたのか？新聞記事によると、犯人は手製銃で狙撃したということだ。銃って、作れるのか！とても驚いた。専門的な知識があれば、自分で作れてしまうなんて！教育水準が高い日本なら、自家製の危険物を製造している人がたくさんいるかも知れない。日本には、隠れた危険がたくさんあるのかもと怖くなった。

安倍元首相のことは、「日本で一番偉い地位にあった政治家」ということしか知らなかった。その日の新聞記事は、どの面も安倍元首相関係の記事であふれていて、日本にとって、とても大事な人だったということが分かった。新聞記事に主な功績が掲載されていた。「アベノミクス」という言葉は、私でも聞いたことがある。日本のために、力を尽くしてくれたのだということがよく分かった。

「なぜ不審者近づけた」と警察の警護体制を批判する記事が載っていた。私も実は、狙撃の知らせを聞いたとき、SPっていなかったの？と思った。でも、私だって、身近に銃を持つ危険な人がいるとは思わなかったように、身辺警護の人も、日本に銃を持った人がいるわけがない、と考えてしまったのかも知れない。それに、選挙があるとき、支援者が政治家に握手を求める映像を見たことがある。警護の人も、悪意を持った人なのか、支援者なのだが、私は思う。お墓参りは、「お墓に参る」と書く。つまり、自分でお墓に足を運ぶことに意味があるのではないだろうか。全く知らない人にお墓を掃除されたり、線香を供えられたりして先祖は困惑しないだろうか。そもそもお墓参りとは人と人とをつなぐということに主な役割があるのだと思う。そう考えると、この新しい形は、私には良いものとは思えないのだ。私たちの生活は便利で効率が良いものへとめまぐるしく移り変わっていく。しかし、最終的には、人と人との関わりが大切なのだから、現代の便利なサービスに頼らないという選択肢も又ありなのではないかと思う。

お墓参りを効果的に行うことができるという事実を前にして、私は真っ先に祖母の顔が浮かんだ。現在祖母は一人暮らしで、祖父は数年前に他界した。そのため、祖父のお墓にはいつも一緒に行っている。祖母の家は少し遠いため頻繁に足を運ぶことは難しいが、お墓参りだけは必ず行くと決めている。なぜなら祖母は会う度にこう言ってくれるからだ。

「顔を見れるだけで嬉しいわ。」

と。そう微笑みながら言う祖母は心から喜んでくれているように感じた。この笑顔が失われてしまうと想像すると何とも切ない気持ちになる。だからこそお墓参りは大切なコミュニケーションの場であり、今の形を守っていく必要があるのだ。

「また来てね。」

と言ってくれる祖母に私は笑顔で返事をする。

「また来るね。」

高校生の部

また来るね

相馬総合高2年　荒木田（あらきだ）麗未（れみ）

コロナウィルス感染拡大の影響により、私たちのお盆の過ごし方は変わった。先祖を偲ぶ気持ちは変わらずとも、お墓参りの新しい形が模索されている。現在、オンラインなどの代替サービスの利用が広がっている。

この記事を読んで私は愕然とした。確かに今は、さまざまな場面でオンラインサービスが当たり前のように活用されている。例えば、高校生に身近なことだと、オンラインのオープンキャンパスや授業などがある。コロナ禍以前よりもオンラインサービスが増えたのは明らかだ。だが、まさかお墓参りをVR映像で見て行う日が来るとは予想していなかった。

記事によると、利用者に代わり、スタッフが現地を訪れ、墓を掃除し、花や線香を供えるのだという。これほどまで民間団体と個人、または家族が深く関わることに驚きを隠せない。それだけではない。記事にはさらに、各種法要を「ユーチューブ」に投稿している団体のことが掲載されていた。しかもライブ中継をするらしい。そうすることにより、幅広い層に参加してもらえるようになったというのはまさに納得だ。デメリットは一つもなく、メリットばかりのような気もする。